
『ありがとう』

w i s h

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ありがとう』

【Nコード】

N1570C

【作者名】

wish

【あらすじ】

この小説を読んでくれる全ての人に伝えたい言葉がある・・・。

最初に言いたい事

貴方（女）は今までに心から『ありがとう』と何度言いました？

家族に、恋人に、友人に、恩師に・・・。

そして自分自身に・・・。

これから書き続ける話は筆者の実体験や実話、そしてネットに広がる広大な海から拾い集めて編集（脚色）したものです。

これを読んで貴方の大事な人に心から『ありがとう』と言ってくれればうれしいです。

貴方のその言葉一つで救われる人もいるのですから・・・。

く筆者の過去の話く（前書き）

ウソも脚色もなく本当のことを書きました。

〈筆者の過去の話〉

俺は現在18歳の予備校生だ。

俺の家は父が開業医をやっていて小さいころから医者になるように言いつけられて生きてきた。

。自分の意思なんかなかった、ただ親に言われてそう育ってきた・・・。

でも中学校に入り、悪い友人やネオンに彩られた夜の繁華街に心引かれた。

そして俺はその暗闇の世界へと一步を踏み出した・・・。

喧嘩・喫煙・飲酒・不純異性交遊・窃盗・無免許運転もやった。

今まで無意識に生きてきた分、この暗闇の世界で自分はつきり生きていくことを実感できていた。

警察の厄介になったこともある、その度に父は俺を殴り叱り付けた。

言い分なんか一度も聞いてくれなかった、そんな父に反抗して家に帰ることも少なくなり無断で外泊する事もしょっちゅうだった。

その頃俺の母は俺の弟（自閉症で養護学校に通ってる）の為に父に出資してもらって事業を起こしていた。

それが俺は気に食わなかった、帰ってきてても家には誰もいなく灯り

も点いてなかった。

そんなある日、母と俺は些細な事で言い争いになった……。

「ケイスケ、あんたはなんでそうなってしまったの？」

母が今にも泣きそうな顔で俺に食って掛かってきた。

「うるせえクソババア！！誰のせいだこうなっちまっただと思つてやがる！！全部でめえと親父のせいだろうが！！」

俺は負けじと声を張り上げて母に食って掛かった、今思えばくだらない意地だった。

「なんで？」

母が驚いた顔で俺を見る、その時は何故かムカついていた。

「お前達親が俺にプレッシャーなんかかけやがって！！弟ばかり可愛がったせいだ！！どうせ俺なんかいなくなってもいいんだろ！！」
今思えば支離滅裂な答えを母に思いつきりぶつけた。

「そんな事ない！！私はケイスケもタカスケ（弟の名）も平等に愛してる！！なんでそれが分からないの！？」

母が涙を流しながら俺の胸倉を掴んで必死に抗議した。

「うつせえ！！今更白々しいんだよ！！んなもん信じられつかよ！！」

俺は母の手を乱暴に振り解いてそのまま部屋に戻り鍵をかけて引きこもった……。

そして荒れた中学生生活を送っていたツケなのか高校は市内の三流高校にしか入れなかった。

入ってから学校を無断欠勤し部屋でダラダラしたりパチンコや麻雀ばかりしていた。

正直学校なんか面白くなかった、折角10年間もやっていた剣道も部活の顧問や先輩との対立であっさり辞めた。

母は俺の為に色々してくれた、ウソを付いて学校を休ませてくれたりもしてくれた。

二学期になってようやく落ち着き真面目に登校し始めたが、そこには俺の居場所なんかなかった。

母には心配をかけまいと『友達と今日はOOやって遊んだ』とかウソを付いてごまかし続けた。

やがてそんな生活を送っていたせいにか心が壊れた。

部屋に引きこもって登校拒否になりはじめていた。

そんな俺の為に母は知り合いの医者の方にカウンセリングに連れて行ってくれたり励ましてくれたりした。

中学時代にあんな酷いことを言ったのにそれを忘れたのかとも思えるほどだった。

高校時代の成績は目も当てられなかった、理数科目はいつも赤点で文型科目で点数を稼いでいたような物だった。

母は自分の貯金を削り家庭教師を2人も三年間雇ってくれた、それ

で少しは成績が上がリ卒業はなんとかスレスレの超低空飛行で出来た。

進路はもちろん大学進学、東京の私立大学の医学部を受験するも見事に失敗。

父はそれで俺に医者にするのを諦めたらしく『好きに生きる』とだけ言った。

俺は自分の将来に絶望して自殺をも考えた、だが俺は常に母に救われた。

「お父さんはああ言ってたけど・・・あんたの事を心配してるんだよ？」

薄暗い部屋で呆然と過ごしていた俺に母が言った。

「どこがだよ・・・もう俺は駄目なんだよ、なあ？母さんも俺なんか金出すよりも妹に望を託した方がいいんじゃない？」

自暴自棄に陥り半分アルコール中毒になりかけていた俺はうつろな目で母にそう言った。

「俺はもう駄目なんだよ・・・親父や母さんの言う通りに真面目に勉強してればこんな事にはならかった・・・もう俺死のうかな？死んだら楽になるだろうし、保険金も降りるだろうさ」

俺はラム酒の入ったボトルを傾けながら自嘲気味に言った。

次の言葉を出す前に俺は強烈な痛みを頬に感じた。

・・・母が俺が生まれて初めて本気で俺を叩いたのだ。

「殴れよ・・・どうせ俺なんか可愛くないんだろ！！殴れよ！！いや、殺せよ！！殺してくれよ！！」

俺は殴られた痛みからか堤防を切ったように感情を爆発させた。

母は無言で俺に歩み寄り、そして・・・。

・・・俺を抱きしめた。

「自分が腹を痛めて産んだ子供が可愛くない訳無いでしょ！！死ぬなんて許さない！！やりもしないで自分を全部否定なんかするな！！」

母が俺を抱きしめながら俺に言った。

俺はその言葉に涙を流した、中学時代いつも迷惑をかけ、高校時代はウソを付き続けた俺をそこまで想っていてくれたことに・・・。

「全部に挑戦して・・・もしも全部駄目だった時、その時死になさい・・・その時は母さんもあんたと一緒に死んであげる・・・」
母がグッと俺の頭を胸に埋めて泣きながらつぶやいた。

俺は声を殺して泣き続けた。

そして俺は作家か声優になる為に得意だった文型科目を勉強する為に予備校に通う決意をした。

そして母は俺が一人暮らしをする為に遠い街へ引っ越す前夜に飲みに来て行ってくれた。

「おいおい、母さん・・・俺は未成年だぞ？」

俺は一応社交辞令的に皮肉を込めて言った。

「高校を卒業したらもう大人よ」

母はさらりとそう応えながら酎ハイを呑み続けた。

アルコールが入ってか二人で色々なことを話した、昔のあの出来事も。

「あの時はバカなこと言ったなあ・・・」

俺も精神的に大人になりしみじみ自分の愚かさを恥じて言った。

「あんたも大人になったわねえ・・・」

母がウリウリと俺の頭を撫でながら言った。

「俺もいずれ結婚して家庭と子供を持つんだろうなあ・・・」

俺がはにかみながら未来に想いを寄せて呟くと母はどこか寂しそうな顔をした

「ケイスケ、これだけは覚えてなさい・・・あんたが幾つになっても・・・あんたは私とお父さんの大事な子供だよ」

母が笑顔を作って俺に諭してくれた。

「分かってるさ・・・」

俺は恥ずかしそうにそう呟き返した。

その翌日、俺と母は遠くの街へと行くために朝早く車に乗って故郷を旅立った。

そして三日後アパートについた荷物を整理し終え母は帰ろうとした。

どこか寂しかった、どんなことがあっても俺の味方であってくれた

母がいなくなる。

どんなことをしても俺を庇ってくれた母がいなくなる。

だけどそんな感謝の言葉一つ出なかった・・・。

そして母が『元気でね、夏休みに遊びに来るから』と言ってドアを閉めようとした時。

俺は生まれて初めて素直な笑顔で母に感謝の言葉を言った。

「ありがとう・・・母さん」

母はニコリと微笑んでドアを閉めて帰っていった。

そして今、俺は時々予備校をサボりつつもどうにか真面目に生きている。

自分の夢も決まり自分の道を歩んでいる、その先は見えないけどいつか自分が息絶えるその時まで必死に歩み続けている。

俺に全力の愛を注ぎ続けてくれた母、その存在が大きいのは言うまでもない。

未だに完全に素直になれない貴方の愚息ですが・・・今ここではつきり言わせてください。

どんな時も俺の味方でいてくれて、ありがとう。

俺の為に色々してくれて、ありがとう。

そして――。

産んでくれてここまで育ててくれてありがとう、母さん。

ゝ筆者の過去の話ゝ（後書き）

書き終えた今、ちょっと涙が出てきました。
本当にありがとう、母さん。

ゝ温情判決ゝ（前書き）

記憶に新しい事件を多少脚色しました。

〈温情判決〉

2006年7月21日、一つの事件の判決が下された。

話はそこから始まる――。

事件内容を大まかに纏めると。

同年2月1日、京都市伏見区桂川河川敷にて無職の片桐康晴容疑者（54歳）が認知症の母親を介護疲れと生活苦からか母親と相談した上で母を殺害し、直後無理心中を図ろうとしたとの事。

片桐氏は母を殺害後に自分も自殺を図るも発見され一命を取り留めたとの事。

片桐氏は両親と三人暮らしだったが、95年に父が死亡。その頃から母親に認知症の症状が出始め、一人で介護していた。

母親は05年4月頃から昼夜逆転し、夜の街を徘徊し警察に保護されなど症状が進行していた。

片桐氏は休職してデイケアを利用したが、介護負担は軽減せず9月に退職。

生活保護は、失業給付金を理由に認められなかった。

――『死ぬということか』と片桐氏は語った。

介護と両立する仕事は見つからず、12月には失業保険の給付がストップした。

カードローンの借り出しも限界額に達し、デイケア費やアパート代が払えなくなった。

- 06年1月31日に心中を決意した。

『最後の親孝行に』と片桐氏はこの日、車椅子の母を連れて市内を観光。

市内のコンビニエンスストアで片桐氏は、財布に残っていたわずかな小銭で菓子パンを購入し二人で食べたという。

そして・・・2月1日早朝同市伏見区桂川河川敷の遊歩道で母に語りかけた。

「もう生きられない、ここが終着地だよ母さん」と片桐氏が母に言つと。

「そうか、駄目かい。康晴・・・ずっと一緒にいようかと寂しそつに答えた。

「ごめんな・・・」と片桐氏が謝ると。

「こつちにおいで・・・」と母親は呼び。

自らの額を母親の額にくっつけると。

「康晴はワシの子じゃ。ワシがやってあげる・・・」
と言った。

この言葉を聞いて片桐氏は殺害を決意。

母親の首に手をかけゆっくりと締めて行った。

「今までありがとうな・・・康晴」

それが母親の最後の言葉であった。

母親を殺害後、片桐氏も包丁で自らの首を斬り自殺を図った。

しかし・・・一命を取りとめ現在にいたる。

冒頭陳述の間、片桐氏は背筋を伸ばして上を向いていた。

肩を震わせ、眼鏡を外して右腕で涙を拭う場面もあった。

裁判では検察官が片桐氏の献身的な介護の末に失業を経て、追い詰められていく過程を供述。

殺害時の母子のやりとりや、「母の命を奪ったが、もう一度母の子に生まれない」という供述も紹介。

陳述の最中に、検察官が涙で声を詰まらせるという異例の雰囲気の中で裁判が進行した。

目を赤くした東尾裁判官が言葉を詰まらせ、刑務官も涙をこらえる

ようにまばたきする等、法廷は静まり返った。

東尾裁判官は懲役2年6月、執行猶予3年を言い渡し。

「痛ましく悲しい事件だった。今後あなた自身は強く生き抜いて、絶対に自分を殺めることのないよう、母のことを祈り、母のためにも幸せに生きてください」

と最後に片桐氏に語りかけた。

法廷には、傍聴人と片桐氏と検察官のすすり泣く声が響き、法廷は悲しみに包まれたという・・・。

（引用：youtube『温情判決 介護のはなし（認知症の母親殺害事件）』）

ゝ温情判決ゝ（後書き）

流す涙は人それぞれ、貴方はまた自分の母の子として生まれたいで
しょうか？

くいつか晴れ渡る空の下で（前書き）

ふと中学時代を思い出して書きました。

くいつか晴れ渡る空の下で

俺は教師と言う人間を信用しない。おそらくそれは未来永劫変わらないだろう。

そう思い始めたのは中学校に入ってからであった。

一年の担任はどこにでもいる普通の中年の理科の教師だった。自分にとって利益の無いことはしたくないマニュアル型の役人みたいな人間であった。

無論そんな人間に好奇心旺盛な若者達を抑える力なぞなかった。所謂学級崩壊の始まりである。

逆に二年の時の担任は自己中心的で独裁的な英語の教師であった。自分に逆らう生徒は成績を落とし容赦なく暴力を振るう。

当然反抗期真っ只中だった俺達がそんな人間に従うはずもなかった。組織を作り一致団結して教師に、そして社会に反抗した。

結局どいつもこいつもロクな大人じゃねえ。やっぱり大人より時代は若者なんだよ。

そうやって俺達はどんどん荒れて行った。破滅と言う名を隠した自己満足的正義に溺れながら。

そしていつの間にか俺達は学校のPTAや保護者の間で『史上最底のクラス』と言う烙印を押されてしまった。

それでも別に構わなかった。正直今が楽しければそれでいいや的な思想が蔓延していた。

喧嘩・喫煙・飲酒・窃盗・不順異性交遊・恐喝：e t c。

ワルと呼ばれる為に俺達は何でもやった。今考えればアホ丸出しである。

だが当時の俺達はそんな事を露とも思っていなかった。

そして俺達はいつの間にか最終学年になっていた。

それでも俺達はいつもと同じ昼過ぎに銜えタバコにだらけた格好で登校するような生活であった。

ここだけの話、俺が中学に入って荒れたのには幾つか理由があった。

先にあげた教師連中に対する反抗はもちろんの事。

大人になることへの不安。己のメンツの成立。世間に対する憎しみ。

そしてなによりの理由は『寂しかった』ことである。

俺の両親は共働き状態で家に誰もいなかった。最も多感な時期を一人で過ごしていた訳である。

当時の俺は高校進学のために親に無理矢理塾に通わされていた（中学二年生の時に喫煙で退塾処分）。

その時、夜遅くに繁華街を歩けば同じ歳だろうか若者達がコンビニの前にたむろしていた。誰に決められる訳でなく、自分の好きなように生きる彼らがとても眩しく思えた。

そして中学二年生の時（一番荒れていた時期）に晴れて退塾処分となった俺は不良グループに接近し行動を共にするようになった。

喫煙・飲酒を覚え、喧嘩で相手のプライドを踏みにじる喜びをも覚えた。

親の財布から金を抜き取りカラオケやゲーセンで豪遊する毎日だった。

そんな俺が3年になりある人物にであつた。

俺にとって生涯の恩師であり。俺の行き方を変えてくれて人生を教えてくれた人である。

その人は俺の中学3年生の担任であり音楽教師である。

最初の印象はガタイのいい背の高い。どこにでもいる口うるさい先公^{コウ}だった。

当然俺達は今までどおりの生活スタイルだった。遅刻は当然の如く校内で喫煙も当たり前であった。

『どうせ他の教師連中と同じだろう』、それが俺達の間での人物評価であった。

だが何かがおかしかった。月が変わるたびに俺達の仲間が一人また

一人と真面目に戻って行つた。

そして結局片手で数えるほどしか仲間が残っていなかった。全盛期は学校中のワルを裏から掌握していた俺がである。

孤立するかもしれない不安と焦燥感と裏切りに対する怒りで悶々とする日々を過ごしていた。

ある日、別のクラスの奴と些細な言い争いから掴み合いの乱闘になった。所謂感情の爆発である。

その時身で割って入って仲裁に入つたのが担任であつた。

途中で止められて気に食わなかったが丁度よい機会だからと大人しく説教を聞いてみた。

驚いた事に彼は親身になつて話を聞いてくれただけでなく、真正面から俺と話をしてくれたのである。

どんな話をしたかは今はもう覚えてない。だが正面から俺に向き合つて話してくれたことがなによりも嬉しかった。

社会のゴミ・問題児・反社会的とボロクソに貶められ、正当な評価さえ受けたことの無い俺と正面からである。

ワルから真面目になろうと不器用ながらも努力した俺を先生はちゃんと公平に正当に評価してくれた。

薄暗く憎しみの連鎖が続く世界で生きてきた俺の日々の幕はその日を境に閉じた。

かくして俺は太陽の下を大手を振って歩ける暖かい世界に戻ってきた。

文化祭・修学旅行・体育祭と諸行事をクラスメート達と過ごして行き、本当に楽しかった思い出ができた。

そして卒業式が目前に迫ったある時、先生とこんな約束を交わした。

『いつか、お前が立派になったら二人で酒を飲もう・・・昔の話を肴にな』

この言葉に支えられて俺は今も生きている。時に社会に打ちのめされて失墜の中にある俺を奮い立たせる起爆剤にもなった。

楽しかった日々もやがて終わることになった。

終始笑いが耐えなかった卒業式も終わり。別れの時が近づいていた。式終了後に俺達は教室で先生に向けて最後の感謝の気持ちを歌った。海援隊の『送る言葉』である。

音楽教師だった先生の為に指揮棒を買い、内緒にして日々練習していたのである。

卒業式の最中に涙を見せなかった先生が・・・指揮棒を男泣きに泣きながら振っていたのである。

その姿にかつての不良達が涙を流しながら・・・彷徨いの言葉は天に導かれるように歌っていた。音程もリズムも無く涙を流しながら。

そして俺も涙を流しながらも背筋をきちんと伸ばしながら最後まで歌い続けた。

様々な思いが胸に去来していた。悲しみよりも感謝の念が最後に残った。

こうして俺の波乱万丈に満ちた中学時代は終わりを告げた・・・。

決して俺の進む道は満月の夜道ではない。むしろ新月の中を手探りで歩くような道である。

そして俺がなろうとしている職業は決して世間一般に人に誇れる物では無いのかもしれない。

だが自分がその仕事に誇りを持っているのであれば、すべからくそれは立派な職業ではないのだろうか。

だから俺は先生に今は礼を述べないし、感謝もしない。

いつの日か晴れ渡る故郷の地で堂々と胸を張れるその日まで・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570c/>

『ありがとう』

2010年10月22日00時34分発行